



ヤコブソン、レヴィ＝ストロース、その可能性の中心 —構造言語学から構造人類学へ、そしてベルクソン主義人類学へ—

埴 和 宗 紀

成城大学民俗学研究所研究員

munenori@dr-mineral.co.jp

(受理：2013年5月30日，採択：2014年2月11日)

要 旨

本論はレヴィ＝ストロース人類学をグローバリズムに反旗を翻す武器へと仕立てあげる目的をもつもの、レヴィ＝ストロース人類学がベルクソン主義人類学を経て、ニーチェ主義人類学へと変貌していく過程を鳥瞰しようとするものである。グローバリズムとはスターリニズムの新たな一形態，世界中にニヒリズムを蔓延させる運動である。したがって，ニーチェが発見したニヒリズムを打破する方法は，グローバリズムを瓦解させる方法そのものになっていくことができる。そして，本論の眼目はレヴィ＝ストロース人類学のニーチェ主義人類学への変貌にこそ，レヴィ＝ストロースの「可能性の中心」が存するというスローガンを提示することにある。

キーワード：ヤコブソン，レヴィ＝ストロース，ベルクソン，ニーチェ，ドゥルーズ

導入：ニヒリズムを突き抜ける人類学へ

『構造人類学2』第1部には，ニーチェ哲学における「パースペクティブ」概念の影響を示唆する言葉，「Vues Perspectives」という表題がつけられている。そこにはレヴィ＝ストロース人類学の「可能性の中心」がニーチェ主義人類学の構想の内に存するという暗黙のメッセージが込められているのだ。ニーチェ主義人類学とはニヒリズムを突破する人類学のことであり，それゆえにグローバリズムを瓦解させる力能をもった人類学のことである。というのも，スターリニズムの対応物たるニヒリズムを突破する人類学は，スターリニズムの一形態たるグローバリズムを瓦解させる人類学としても機能することができるからである。

本論は構造人類学がベルクソン主義人類学、ニーチェ主義人類学へと変貌する道筋を、ヤコブソンの共時態概念から説き起こして俯瞰していこうとする試みである。

1. 構造分析の実践的出発点 “共時態 Δt ” : ソシユールからヤコブソンへ

構造分析のプロセスを検討するにあたり、ソシユール学説をめぐるヤコブソンの発言から出発することにしよう。

関係としての時間は…言語価値の体系の中で、ある本質的な役割を果たす。言語科学は価値を扱うと言明しながらも、ソシユール学説は、価値体系の内にある時間要因もまた一個の価値になる、という事実を考慮しなかった (ヤコブソン 1977 : 147)。

ここでヤコブソンが述べていることは、共時態概念を構造分析の現場における実践的使用に耐えるものへと仕立てあげるには、時間性を捨象した共時態を一定の時間の厚みを孕んだ共時態に改変しなければならないということである。では、ヤコブソンの共時態概念が凝縮する時間とはどのような性格をもつ時間であるのだろうか。どのくらいの長さの時間であるのだろうか。

まず、共時態析出の原資料たる“民族誌”の性格を確認しなければならない。民族誌とは何か。それは分析者が野外の調査地“フィールド”に“フィールドワーカー”として飛び出し、“フィールドワーク”と呼ばれる調査活動を行うことから獲得される言語資料体であり、習俗資料体である。したがって、民族誌の性格は調査されるフィールドの性格をそのまま受け継ぐものになっていくこととなる。では、フィールドとは何か。それは地域固有の自然風土に根ざした500人未満の人々が顔の見える関係をもって生活するような集団、人々がある一定の地域語 (dialect) を話し、祝祭、婚姻などにまつわる固有の習俗、儀礼を共有するような集団のことである。そして人類学はそのような地縁集団を“リネージ”と呼んできた。つまり、分析者は“リネージ”というフィールドを調査し、リネージに揺蕩う時間を“民族誌”へと凝縮、胚胎させることとなるのである。

とするならば、リネージの時間とはどのようなものであるのだろうか。その答えはリネージという概念を“クラン”という概念との違いを踏まえ、精確に理解することから獲得される。エドマンド・リーチの卓抜な用語整理を参照しよう。クランとは今現在を生きる3世代の人々が、紙面に描かれた家系図を参照することでしか知ることのできないような5世代以上前の先祖、そこに至るまでの親族すべてを思考することから抽出されるようなカテゴリーであり、親族集団を意味する用語である。それに対し、リネージとは祖父母の世代、父母の世代、子供の世代の混雑体、今を生きる3世代からなる地縁集団のみを意味する用語である。つまり、クランとリネージの違いは前者が現在を超えた時間の幅をもつ概念であるのに対し、後者が現在にのみ定位した概念であるという点に求められるのだ。よって、民族誌とは3世代の時間、現在と呼ばれる時間の厚みを凝縮した資料体であり、共時態とは3世代の

時間の厚みを孕んだ構造、現在の構造であるということになるのである。

さらにここで我々は、3世代の時間の厚みを言語、習俗がもつ創造的進化の歴史“t”と比較した場合、それが“ Δt ”と表現されるべき微細な幅の切片であるという事実にも注目しておかなければならない。ヤコブソンの言語共時態、それは“共時態 Δt ”と表現できる概念なのだ。

2. 構造言語学から構造人類学へ、言語共時態から習俗共時態へ

レヴィ＝ストロースの習俗共時態は、ヤコブソンの言語共時態との対応関係から編み出された概念であり、切片 Δt を孕む概念である。レヴィ＝ストロースの「可能性の中心」を探索する本論も、両者の共時態がもつ対応関係を図式的に整理し、レヴィ＝ストロースの共時態概念の検討へと歩を進めていくことにしよう。

言語とは何か。語から文を作成するレベルに定位するならば、そこには語を隣接させていく規則“サンタグム”と、類似する複数の語の系列の中から1つの語を選択する規則“パラディグム”とを見つけることができる。それゆえに、言語とはサンタグム、パラディグムを横糸、縦糸とするような織物のことである。さらに我々は横糸と縦糸を等位の資格において編み合わせる機械、機織り機のことを考えなければならない。つまり言語とはサンタグムとパラディグムを変数 x , y として駆動させる関数でもあり、“ $f(x, y)$ ”と表現されるべき原理、“言語活動(ランゲージュ)”でもあるということになるのだ。以上を踏まえ、我々は次のように結論しよう。言語共時態とはサンタグム、パラディグムという2つの下位構造と、双方を包括するランゲージュという1つの上位構造とから構成されるトライアドである。

習俗共時態へと視線を移そう。言語共時態と同様、そこには親子関係(filiation)の文法と縁組関係(alliance)の文法という2つの下位構造を見つけ出すことができる。まさに社会体とは親子関係の文法という縦糸と、縁組関係の文法という横糸が等位の資格で編み合わされている「社会編成体」である。

さて、ここでローカルな自然風土を共有しながら今現在を生きている3世代の人々を特に“民衆”と呼ぶことにしよう。民衆が己の生活を営むモード、己の行動を決定するモードには2つのモードがある。ひとつは民衆が己の3世代のことのみを想像するモードであり、もうひとつは己を含む5世代以上のことを想像するモードである。そして、その2つのモードの差異が全く性質を異にする2つの集団性を形成し、各々の集団性に対応する2つの異他的な文法、つまりは習俗共時態を構成する2つの下位構造を産み出すこととなっているのだ。3世代を想像するモードが形成する集団性と文法、これこそガリネージであり、縁組関係の文法である。5世代以上を想像するモードが形成する集団性と文法、それがクランであり、親子関係の文法である。したがって、縁組関係の文法をリネージの文法と呼び換え、親子関係の文法をクランの文法と呼び換えることもできるということになる。

以上を踏まえるなら、習俗共時態においても、やはり2つの下位構造を等位の資格で編成

する1つの上位構造が想定されなければならないということにもなるだろう。まさにレヴィ＝ストロースはこの上位構造に「家」「メゾン」という呼び名を与えた。この「家」原理、「メゾン」原理は、従来の人類学が縁組関係と親子関係を関係づける上位構造として提示してきた“出自原理”というものとは全く異なるものである。というのも、出自原理は2つの下位構造を等位の資格で扱うものではなく、リネージュの文法にクランの文法を優越させ、前者が後者から派生するものにすぎないとする考え方を招来、蔓延させる原理であるからだ。したがって、レヴィ＝ストロースのメゾン原理は、従来の人類学を根底から書き換え、然るべき方向に連れ戻すもの、まさにレヴィ＝ストロースの「可能性の中心」に位置するものであるということができるのである。

3. 戴冠せる出自原理, その退位へ向かって

以上の図式的説明を確認したところで、ドゥルーズ『アンチ・オイディプス』の第3章におけるレヴィ＝ストロース論を参照しながら、レヴィ＝ストロースの習俗共時態の内実をより詳細に探索していくこととしよう。

親子関係は行政的で位階的であるが、縁組関係は政治的で経済的なのである。縁組関係は…位階秩序とは異なり位階秩序からは演繹されない限りの権力と、行政とは同じものにならない限りの経済とを表現している。親子関係と縁組関係とは、いわば原始資本の二つの形態である（ドゥルーズ 1986：180）。

親子関係の文法とは、民衆が己を含む5世代以上の関係を想像する文法であった。再度、リーチの卓抜な例示を参照するならば、5世代以上の親族関係（kinship）は紙面に描かれた家系図を手掛かりにして想像されるものであり、家系図とは5世代以上前の先祖から流れる（descend）もの、世代間の位階、階層（hierarchy）を表現するものである。そして、父系単系出自と形容される社会の場合、その家系図、位階が指し示すのは、子供が父方の姓や財産を継承し、その限りの者として父方の一族に登録され、成員権を付与されてきたという事実であり、その事実が行政的（administrative）に管理、運営、執行（administer）されてきたという事態である。子が父と母の子であるということ、父と子、母と子の関係は親子関係（filiation）と呼ばれる。親子関係の文法とは、姓の継承や財産の相続、成員権の付与にまつわる親族組織の文法であり、子供を父方、母方、いずれの一族に登録するかということを行政的かつ位階的に決定する文法、登録の文法である。

さて、縁組関係の文法とは、民衆が己の3世代のこののみを想像する文法であった。それは親族カテゴリー、親族組織とは関係をもたない文法であり、1つの集団が隣接する他の諸集団との敵対関係の只中で、政治的、経済的に己の自己保存を実現しようと目論む文法である。縁組関係（alliance）の文法とは同盟関係（alliance）の文法であるのだ。つまり、それは民衆が味方にとって政治的、経済的な利益をうむか否かという基準を参照しながら敵方と

駆け引きをする文法、敵対関係を同盟関係に変えていく文法なのである。そのための方便は、例えば敵方の集団にその集団を維持、再生産せしめる増殖力をもった存在、女性を贈与すること、女性を互酬的に贈与し合い、交換し合うサイクルを作成することによって達成されるだろう。したがって、縁組関係の文法とは、男と女の結合を政治的、経済的に操作し、来るべき父と来るべき母の接続を画策する文法、交換の文法であるということになる。

以上のことから、社会とは親子関係と縁組関係という2つの下位構造の編成体であり、5世代以上の世代深度に立脚するクランと3世代の世代深度に立脚するリネージとの編成体であるという結論が導出できる。そして、この社会編成体こそがレヴィ＝ストロースによって「冷たい社会」「真正な社会」と呼ばれ、クラストルによって「国家に抗する社会」と呼ばれることになっているものなのである。

最後に習俗共時態の上位構造についてのドゥルーズの発言も考察しておこう。

子供は、その父の一族か、あるいはその母の一族かに分かれていずれかに登録されるが、ところが逆にこれらの一族のほうからいうと、これらの一族は、父と母との結婚によって表される接続を仲介としてしか子供を登録しないのである。だから、縁組関係が親子関係から派生することはいかなるときにもありえない。そうではなくて、縁組関係と親子関係の両者はともに、本質的に開かれたサイクルを形成しているのである（ドゥルーズ 1986：180-181）。

再度、父系単系出自社会を例にとって説明しよう。子供の誕生、その父方の一族への登録を成立させているのは、それに先立つ父と母の婚姻である。つまり、父方の一族と母方の一族が縁組を結んだという事実である。したがって、親子関係は縁組関係を条件として存在するものであり、少なくともリネージの文法はクランの文法と等位にあるもの、それどころか後者に先行すらしているのものであると考えられなければならない。つまり、家原理、メゾン原理とは、以上の条件を満たす限りにおける、習俗共時態の真の上位構造であり、親子関係と縁組関係を少なくとも等位に置きながら包括する原理のことであるのだ。それはクランの優越を主張する出自原理とは全く正反対の原理であり、クランに対しリネージという切片を優越させる原理でさえあるということなのである。

暫定的に整理しよう。社会体とはリネージの文法とクランの文法とが等位の資格で編成される場、まさに社会編成体である。この2つの文法から社会が編成される現場をよりよく観察、分析することができるのは、国家なき未開社会である。それは国家の出現を押し留める機構が「工学的機械」のごとく働き続けるような「冷たい社会」「真正な社会」であり、それゆえに「国家に抗する社会」である。また、リネージが3世代の、クランが5世代以上の時間的持続によって形成される集団性である以上、「真正な社会」の存立条件は5世代以上の時間的持続に求められなければならない。ただし、発生論的に思考するならば、リネージの存立はクランの存立に先行する。ここから、「真正な社会」の構造分析がリネージの分析

から開始されなければならないというスローガンを導出できることとなる。

4. ベルクソン主義人類学を經由して：共時態 Δt とベルクソンの現在

さて、共時態 Δt の析出から開始される構造分析の現場へと立論の重心を移していくことにしよう。ヤコブソン、レヴィ＝ストロースは線分、切片としての時間、共時態 Δt を分析の出発点に据えた思想家である。真の構造分析とは共時態 Δt を析出し、それを礎石として、創造的進化の歴史 t を司る変換行列、通時態の析出にまで到達していこうとする営みである。ここで我々はヤコブソン、レヴィ＝ストロースの思想とベルクソン哲学との平行関係、対応関係に目配せをしておかなければならない。ベルクソンも切片としての時間を分析の出発点に据えた思想家であるからだ。そして、ベルクソン哲学において切片としての時間には「現在」という呼び名が与えられている。つまるところ、構造主義哲学における共時態 Δt の身分とベルクソン哲学における現在の身分は完全に一致するということである。別言するならば、共時態 Δt とは構造言語学、構造人類学を、ベルクソン主義言語学、人類学へと変貌させる契機なのである。以上の決断の正当性は、『今日のトーテミズム』第5章において、レヴィ＝ストロース自身が、人類学に枢要な役割を果たす先駆者として、ルソーとベルクソンの名に繰り返し注意を促すという事実によっても下支えされることができるだろう。早速、我々はその極めて含蓄の深い発言を参照することにしよう。

肝要なことは、ベルクソンとルソーが内向という歩みによって、つまり、まず外部から把えた思考法あるいは単に想像した思考法を自分自身について試みることによって、異国の制度（ルソーの場合は、それが存在するとも気づかずに）の心理学的根拠にまで遡るのに成功したということである。こうして、この二人の哲学者は、おのおのの人間精神は、いかなる距離によってへだてられているものでも、人間精神の中でおこることならこれを検討する実験の場となりうるということを立証している（レヴィ＝ストロース 1970 : 168）。

ここでレヴィ＝ストロースは、共時態 Δt について極めて重要な指摘をしている。共時態とはフィールドワーカーが自らの精神の側で起こる言語学的事象、人類学的事象を分析して導出される構造、フィールドワーカーによるフィールドワーカー自身の精神分析によって析出されるコードであるということだ。つまり共時態が凝縮する時間の厚み Δt とは、外界の物質の運動を司る物理学的時間の厚みではなく、内界の精神の活動を司る言語学的時間、人類学的时间の厚みであるということなのである。共時態を析出する分析は共時的分析と呼ばれるが、レヴィ＝ストロースの言いたいことは、構造主義に先駆けて、すでにルソーとベルクソンが共時的分析を実践していたということ、したがって構造分析はルソーとベルクソンが編み出した方法論によって導かれなければならないということなのである。この方法にベルクソンは「交差測量法」という呼び名を与えたが、ベルクソン主義人類学を經由してニー

チェ主義人類学へ到達しようと目論む本論が行論の雛型とするのも、まさにこの交差測量法に他ならないということである。ルソーとベルクソンは精神の側の時間の厚みを分析した構造主義の先駆者であり、「人間科学の創始者」だったのである。

以上を確認して、ベルクソンとヤコブソン、レヴィ＝ストロースの対応関係の内実に踏み込んでいくこととしよう。交差測量法によって司られるベルクソンの分析の出発点、ベルクソンの現在とはどのようなものであるのだろうか。引き続き、構造主義哲学とベルクソン哲学の照応関係を深く探求したドゥルーズの発言に耳を傾けることが有益だ。

根源的総合は、生きられた現在を、あるいは生ける現在を構成する…過去も未来も、まさしくその現在に属している。すなわち、過去は、先行する諸瞬間が…把持される限りにおいて、現在に属し、未来は、期待が…先取りを遂行するがゆえに、現在に属しているのである（ドゥルーズ 1992：120）。

ベルクソンの現在は、我々の精神の側にある時間、心の時間であり、「生きられた現在」「生ける現在」と呼ばれもする。我々は想像力と呼ばれる能力を使用して、一定の持続する時間すべてを心の内に凝縮することができる。そして、この想像力によって凝縮された時間の厚みがベルクソンによって「現在」と呼ばれることになっているのである。想像力のカバーする時間の厚みは伸縮自在であり、一寸前の瞬間からの短いものであることもできれば、数十年前の時点からの長いものであることもできる。そして、想像力が一寸前からの時間を捉えている場合でも、数十年前からの時間を捉えている場合でも、その時間は現在に属していると考えられねばならず、決して過去と呼ばれるべきものではないということができる。それゆえ、それらは“古い現在”もしくは“かつての現在”と呼ばれなければならないということでもある。想像力は「古い現在」を今、この瞬間、「アクチュアルな現在」において把ね持っている、把持しているということなのである。

では、かつての時間ではなく、これからの来るべき時間についてはどうか。もちろん、「アクチュアルな現在」において働く想像力は、これからの時間すべてに想いを馳せ、予め捉えることもできている。それゆえ、その来るべき時間は決して未来と呼ばれるべきではなく、“新しい現在”あるいは“来るべき現在”と呼ばれなければならない。想像力は“来るべき現在”を予め持っている、予持しているといわれなければならないのである。したがって、現在とは「アクチュアルな現在」を中心として、“かつての現在”から“来るべき現在”に至るまでの時間的持続のすべて、一定の厚みをもった時間的切片のことを指しているということになるのだ。

こうしたベルクソン主義的な説明を、ヤコブソンとレヴィ＝ストロースの共時態概念に対応させてみよう。言語共時態を例にとるならば、それは祖父母の世代の言語、父母の世代の言語、子供の世代の言語の混有体が有する構造である。ひとつの社会の中心をなし、それをアクチュアルに支えているのは父母の世代であるから、それらの言語は順に“かつての現在

の言語”, “アクチュアルな現在の言語”, “来るべき現在の言語”と呼ぶことができるだろう。共時態 Δt とは, ベルクソン哲学における線分としての現在が有するコード, 切片としての現在を分析し析出される構造なのだ。それはアクチュアルな現在という中心が, 過去と未来をそれぞれ“かつての現在”“来るべき現在”として総合しているような1ユニット, 「生ける現在」の構造である。以上をもって, 我々はヤコブソン言語学とレヴィ=ストロース人類学がベルクソン主義的な言語学, 人類学へと変貌し始める端緒を拓き, 確認したこととなる。

今後の行論を前に我々が常に念頭に置いておくべきことは, ベルクソンが“現在”という用語を語る時, それをヤコブソンとレヴィ=ストロースの“共時態”という用語に置き換えて読解していくということ, さらにはそれが Δt と表現されるということである。

5. 共時態 Δt の使用法という難問：共時的分析から通時的分析への跳躍

構造分析は交差測量法によって導かれなければならない。構造分析には順に共時的分析, 通時的分析と呼ばれる段階があり, 前者はベルクソンの現在の構造, 共時態 Δt を析出する分析である。通時的分析とは何か。交差測量法は現在の分析, 過去の分析, 未来の分析という順番でなされるものであり, したがって通時的分析とはベルクソンの過去, ベルクソンの未来の分析である。なぜ交差測量法を雛型とせねばならないのか。共時的分析が導出した共時態 Δt は, 後続する通時的分析の礎石として駆使されることとなるのだが, この共時態 Δt の使用法を間違えると, 構造分析全体が失敗に終わるからである。交差測量法こそが, 共時態 Δt の使用法という陥穽を回避する唯一の方法, 真の方法なのである。以上を確認し, ドゥルーズのさらなる助力を仰ぎながら, 交差測量法を雛型とする通時的分析のサーヴェイを進めていこう。

互いに少しずつ重なり合った跳躍を通じて, 現在が絶えず動くということである。そこに, 現在というもののパラドクスがある (ドゥルーズ 1992: 132)。

ここでドゥルーズは, 共時的分析の対象たる線分, “ベルクソンの現在”が次々と重なり合いながら少しずつズレていく運動をおこなっているという事態を指摘している。そしておそらくは, この重なり合いの運動をレヴィ=ストロースが“ブリコラージュ”と名づけたことを意識しながら書いてもいる。さらに彼は, 共時的分析から通時的分析へ, 現在の分析から過去の分析への移行の端緒に立ち現れるベルクソンの現在の使用法, 共時態 Δt の使用法という問題を「パラドクス」と表現してもいる。共時態から通時態へ到達するということは, 線分から直線へ到達するということである。フィールドワーカーが析出する共時態 Δt とは3世代に跨る線分, いわば1枚の屋根瓦の構造である。ある共時態Aを想定すると, 世代交代に伴ってそれは共時態Bへと生成変化し, さらなる世代交代とともに共時態Cへと生成変化する。左右に端点をもつ屋根瓦としての“共時態”は世代交代のたびに1世代

分、横にズレていく。したがって、世代交代が1回起こるということは2枚の屋根瓦が2世代分の長さを共有しながら重なっていくということ、世代交代が2回起こるということは3枚の屋根瓦が重なっていくことを意味するのだ。これが先の引用において、ドゥルーズが述べていることの概要であり、その結果、A、B、Cという屋根瓦はより長い1枚の屋根瓦を構成することになっていくということ、同様の過程が果てしなく反復されて、より長い線分、屋根瓦が立ち現れ続けていくということなのである。

では、より長い線分としての時間をもつ構造を析出し続けていけば、最終的に無限遠の彼方まで延びていく直線の構造を析出することができるのだろうか。線分を重ねていってもより長い線分に立ち至るだけであり、それは決して直線にはならないのである。これこそが構造分析に横たわる難問、共時態 Δt の使用法という問題である。共時態という線分をただ横に重ねていっても、通時態 t という直線には立ち至らないということなのだ。

この袋小路からの脱出路はひとつしかない。まず、線分としての時間 Δt と直線としての時間 t とが、全く次元の異なる時間であることが前提だ。そのうえで、その次元の違いを紙面に図示するならば、以下のように表現されるということになるだろう。紙面の中央に左から右に線分を重ねていくスペースを確保し、その上側のスペースに果てしなく伸びていく直線を引くことで、双方の次元の違いを表現するのである。先程、交差測量法の手順が現在の分析から過去の分析に引き継がれることを述べた。それゆえ、通時的分析とはまずは過去の構造として立ち現れるものである。ゆえに、共時的分析から通時的分析への移行は、ブリコラージュがなされるベルクソンの現在の次元から、その上方に設定されたベルクソンの過去の次元への跳躍、次元を跨いだ跳躍として思考されねばならないということになるだろう。では、下方の現在の線分の重なりと、その上方の過去という直線とのあいだの跳躍は、どのように図示されモデル化されるべきであるだろうか。それこそがベルクソンが逆円錐の図で表現しようとしたことに他ならない。そこでは現在が平面で表現され、その平面に円錐の頂点が接する逆円錐というかたちで過去が表現されている。我々は線分と直線のあいだにこの逆円錐を嵌め込む作業を完遂し、次元の異なる現在と過去、共時態と通時態との関係をダイレクトに掴めるようなイメージを作成してみよう。

6. 過去と現在、通時態と共時態、尖筆と紙片：活版印刷機のイメージ

再度、ドゥルーズの助力を仰ぐことが有益だ。

土台と根拠を区別しなければならない。土台とは土地に関することであり…しかし根拠はむしろ天からやってくる…もろもろの土台に降りてきて、ある不動産登記証書によって土地と占有者とを比べ合わせるのである。習慣は時間の土台であり、過ぎ去る現在によって占領された動く土地である…現在を過ぎ去らせ、現在と習慣とを調整するものは、時間の根拠として規定されなければならない（ドゥルーズ 1992：132）。

ドゥルーズは現在を土台、過去を根拠と呼び換え、過去が現在にその上方から作用するものであることを述べている。そしてその作用は現在に登記、登録、刻印をする作用であり、同時にそれが現在を流れ去らせる作用にもなっているということを述べている。以上のドゥルーズの指摘に触発された我々は、活版印刷機のイメージを導入することにしよう。そのイメージを常に念頭に置くことで、前節の末尾で言及したベルクソンの逆円錐モデルをめぐる直観的な理解へと到達することができるからだ。

共時態 (= 現在 = 線分 = 切片 = 屋根瓦) とは、ベルトコンベアに載って活版印刷機の只中を次々に過ぎ去っていく紙片である。そして紙面の上方には逆円錐形のペン、尖筆がセットされていて、その紙片に印字、印刷、刻印、登記が行われていく。現在という紙片に次々と署名、登記する尖筆こそが過去である。そして、過去という尖筆が署名、登記を終了することが、前の紙片を過ぎ去らせ、次の紙片を尖筆の下へと運んでくるようにベルトコンベアを繰り返し起動するスイッチともなっている。過去という尖筆は現在という紙片が過ぎ去っていく活動を保証する根拠として存在しているのだ。現在という紙片は過去という尖筆が接して印字をとりおこなうための土台であり、逆に言うなら、過去という尖筆は現在という紙片が過ぎ去っていくことの根拠であるということなのである。まさに根拠としての過去は上方から、天から降ってくるものであるのだ。

また、この活版印刷機は1枚1枚の紙片に刻印される内容が同一ではなく、常に生成変化を遂げていくような機械でもある。つまり過去という逆円錐形の尖筆の内部には無数の印刷の原版が畳み込まれ蠢いており、さらには、原版そのものが生成変化を遂げるメカニズムが作動しているのである。そしてベルトコンベアに載って運ばれてくる紙片が更新されるたびに、尖筆は別々の版を生成、選択し、そこに印刷するというわけである。

例えば1枚1枚の紙片に刻印される和歌で考えてみよう。和歌には連歌という知的遊戯がある。連歌はそれぞれの句が“CALL AND RESPONSE”の関係をもって展開されていくものであるから、印字された「うた」たちは隣接し合いながらも、決して孤独なわけではなく、いわば喚喩的に結合して連なっている。連歌の宴には始まりと終わりがあるだろう。最初の「うた」が刻印されたときに始まり、最後の「うた」が刻印されたときに打ち切れ、それまでに展開された「うた」の群れがその晩の連歌の宴としてひとまとまりにされる。いわば隠喩的に束ねられる。連歌は喚喩作用と隠喩作用のフィードバックによって出来上がっているのだ。この喚喩作用と隠喩作用の組み合わせは、連歌を構成する和歌についても成立する。和歌は“5, 7, 5, 7, 7”という「5つの分節」をもっているが、このそれぞれの分節は各々が喚喩的に連鎖すると同時に、隠喩的にひとつに束ねられてもいる。

さらに、この喚喩作用と隠喩作用の組み合わせは生と死という対概念によっても説明できる。前の句が終わる。沈黙、空白を挟んで、次の句が始まる。前の句の終わりは次の句の始まりを用意する。終わりとは始まりをつなぐ沈黙、空白とは、終わりを始まりへと変換する行列に他ならない。終わりとは死であり、始まりとは生である。沈黙において、死を生に反転するメカニズムが働いているということである。したがって、終わりを始まりに変換させる

構造、死を生に反転させる行列の胎動が思考されなければならない。この行列は前の句と次の句を換喩的に結合する蝶番であり、双方の変換を可能とする錠でもある。沈黙、空白の内にあるということ、それは不可視であるということである。つまり、「うた」を構成する可視的な関係どうしが、それらの間隙、空白、沈黙のうちで働く不可視の行列によって換喩的に関係づけられているということであり、前の句と次の句が関係づけられ結びつけられているということだ。関係を関係づける行列、それは「関係の関係」とでもいうべきものであり、まさにレヴィ＝ストロースの「構造」に他ならないのである。活版印刷機における前の紙片から次の紙片への移動は過去という尖筆の運動が司っていた。とするならば、紙片と紙片のあいだにおいて双方を関係づけているのは、過去という尖筆の運動であるということになり、死を生へと反転させる行列、構造こそが尖筆の運動であるということになるだろう。1枚の紙片が過ぎ去り、次の紙片が来るまでの空白の時間に、尖筆は次の紙片に印字する版を選択する運動、生成する運動を行っているのだから、現在と現在のあいだの余白において蠢くのは過去なのである。つまりレヴィ＝ストロースの構造とはベルクソンの過去を分析して析出される構造だということである。

7. ベルクソンの過去：神話は存在しない

活版印刷機のイメージをめぐって、ベルクソンの過去たる尖筆内部の運動についても幾何か詳論しておかなければならない。この過去についてドゥルーズは次のように述べる。

過去一般という純粋なエレメントは、過ぎ去る現在に先立って前存しているのである。したがって、根拠の役割を果す、時間の実質的なエレメント（かつて現在であったためしのない《過去》）が存在するわけである（ドゥルーズ 1992：136）。

紙片の上方に設置された逆円錐形の尖筆、その内部には無数の印刷の原版が畳み込まれ蠢いており、そこにおいてそれらが絶えず生成変化を遂げるメカニズムが駆動しているのだが、上の引用でドゥルーズが述べているのはそこには決して紙片に印刷されたこと、されることのない究極の原版が存在しているということである。その究極の原版の在り処とは逆円錐の底面に他ならない。紙片に印刷され顕在化することができる版は、逆円錐の頂点と底面の中間に位置する無数の切断面をなしているものにすぎないのだ。そして、逆円錐の内部における印刷可能な版が相互に生成変化し合い、絡み合う運動は、底面と頂点を両極とした中間地帯の無数の切断面を貫通する上下運動、無数の切断面の収縮、弛緩の運動として表現されることになるだろう。つまりは、その運動を母胎としてこれらの切断面のうちのひとつの版が選択され、紙片に刻印される版になっていくということである。

言語共時態、習俗共時態の分析という位相へ、以上の産出メカニズムをパラフレーズしてみよう。逆円錐の中間地帯に位置する無数の断面が、現在として顕在化することのできる言語共時態、習俗共時態である。つまりは地球上に存在することの可能なりネージ、真正な社

会である。だが、逆円錐の底面にはかつての現在にも、アクチュアルな現在にも、来るべき現在にも決して顕在化することのない究極のリネージ、究極の真正な社会が存在している。真正な社会の存立において枢要な役割を果たす根幹的な習俗、“神話”について考えるなら、究極の神話なるものは決して顕在化することがないということになるだろう。つまり、地球上に出現する各々の神話は決して完璧ではないということ、究極の全体性ではなく、その一側面、一部分でしかないということなのである。まさにレヴィ＝ストロースがその神話論において提示したスローガン、「神話は存在しない」という思想は以上において説明してきた事態を一言するものに他ならない。究極の全体性たる神話は、逆円錐の中間地帯に蠢く無数の断面、無数の部分的神話を世界へと送り出す根拠として、逆円錐の底面において潜在的に胎動しているということである。ベルクソンの過去とは一度も古い現在であったこと、あることのないような過去であり、ルソーの自然状態と全く同一の規定をもつ潜在的な過去である。以上の検討においても、レヴィ＝ストロースにとって、ルソーとベルクソンがいかに重要な先駆者であるのかが理解できるだろう。

8. Δs としての共時態、特異性と個別性、普遍性と一般性、人類学と精神分析

さて、直観的理解へと到達したところで、いよいよベルクソンの現在から過去への跳躍がいかにして果されるのかということについて、その問題を構造言語学、構造人類学にパラフレーズしたかたちで考えていこう。

言語体系の分析において内的因子として時間を介入させるのならば、その分析に際してさらに、言語の内的因子の集合のうちに、空間をも含ませねばならない（ヤコブソン 1983 : 85）。

ヤコブソンの共時態概念は時間の次元だけでなく、空間の次元においてもその線分性、切片性を遺憾なく発揮、導入するものである。共時態 Δt とは、同時に共時態 Δs でもあるのだ。世代間で微妙に異なりながらも、総体としてはある一定のまとまりをもつものと見なすことのできる地域語、あるいはそれが話されている各々のリネージ、それらをひとつの円環と考えよう。地球外からこの宇宙船地球号を俯瞰すると、地球上にはリネージもしくは地域語という幾多の円環が分散し、繁茂していることになるだろう。これらの隣接する円環すべてを横断線で結ぶならば、地球上は横断線の網の目で包まれることになる。この網の目を織り成す1本1本の糸は、それを通して地域語や花嫁が互酬的に飛び交い往来する交換のライン、コミュニケーションや交易を成立せしめる交通のラインだ。フィールドワーカーたちはこのラインを横断的に辿り、飛び移り、横切りながら調査旅行をしていく。このフィールドワーカーたちが辿る横断線は各リネージ、各地域語を喚喩的に連鎖、結合し、分裂症的な分歧を成しながら形成されたラインであると考えることができる。この地域語の喚喩的連鎖、

分裂症的連鎖は社会言語学、言語人類学において「地域語連鎖体 (dialect chain)」もしくは「地域語連続体 (dialect continuum)」と呼ばれ、その喚喩的に隣接するリネージュの連続体において、隣り合うリネージュでは容易に言葉が通じるが、遠く隔たったりネージュ同士では言語が相当異なることになっているという事態を指している。

各々のリネージュ内で話される各々の地域語のコードをヤコブソンは下位コードと呼んだ。それは、フィールドワーカーがひとつのリネージュを調査し分析の果てに析出する共時態 Δt のことである。また、フィールドワーカーは特定のフィールドに拘泥するものではなく、隣接するリネージュのセリーを左から右へと順々に横切りながら渡り歩くかと思えば、あるときにはそれらひとつながりのセリーとは全く異なるセリーへと跳躍し、そのセリーをフィールドワークし始めることもある。あるいは、信頼の置ける別のフィールドワーカーの原資料体とその分析結果を参照し、考察を深めていくこともある。いくつものリネージュを横断すること、それはいくつもの地域語を遍歴することであり、フィールドワーカーは調査を重ねるにつれ、いくつもの下位コードを変換させる行列、下位構造を内在化していくこととなるだろう。フィールドワーカーが左から右へと“ n 個”のリネージュが連なるセリーを遍歴したとき、彼が内在化するのは“ $n-1$ 個”の下位構造であるだろう。そしてその際、フィールドワーカーはこれらの下位構造を貫通するより普遍的な変換構造、上位構造を内在化することにもなるわけであり、したがって、いくつもの異他的なセリーを遍歴したフィールドワーカーが内在化している構造は、あらゆる言語を貫通する普遍的な変換行列、真の意味での構造へと接近し彫琢されていくこととなるわけである。とするならば、普遍的な変換行列たる構造を導出する分析、構造分析は、フィールドワーカーが自らの精神の内に内在化された普遍的構造を析出するという作業、フィールドワーカーによるフィールドワーカー自身の精神分析によって取り出されるということになるだろう。ここにレヴィ＝ストロース人類学とラカン精神分析との緊密な変換関係が存するのだ。

ヤコブソンとレヴィ＝ストロースが自らの精神分析を通じて探求したのは、世界中のリネージュが有する言語、習俗の相互変換を可能とする究極的な構造、「基本構造」である。そして、彼らにとってそれこそが真の意味で構造と呼ぶに値するものなのである。ヤコブソンの「音素の三角形」、レヴィ＝ストロースの「料理の三角形」とはまさにこの基本構造として導出されたものなのだ。この基本構造はあらゆる言語、あらゆる習俗を貫通する普遍性であるから、個々の下位コードが有する特異性を圧殺するものでは決してない。 Δs としての共時態を出発点に据えること、そこから導出される普遍的共時態としての基本構造は、リネージュ各々の特異性、地域語各々の独自性を抑圧、圧殺するものではなく、むしろその特異性を主張するものなのである。各々のリネージュの特異性を圧殺しないような統一性は“普遍性”と呼ばれ、圧殺するような統一性は“一般性”と呼ばれる。人類学において一般性の最たるもの、それは国家である。一般性たる国家によってリネージュが圧殺される時、その特異性は個別性へと貶められ、それに取って代わられる。だが、特異性は決して無に帰すわけではない。貶められ、沈黙させられる、抑圧されるだけだ。それは潜在的に実在することを

止めない。リネージはいつでも一般性に抗する特異性、「国家に抗する社会」であるのだ。ヤコブソン、レヴィ＝ストロースが提示した言語、習俗の基本構造は、決して一般性であってはならない。普遍性でなければならない。それこそがヤコブソン、レヴィ＝ストロースを「その可能性の中心」において思考、読解する方向である。

以上の事実をベルクソンの過去と現在の関係に定位してパラフレーズしてみよう。左から右へと A, B, C…と複数のリネージが連鎖しており、フィールドワーカーがその連鎖を左から右へと横断的に調査していくとする。彼らは A, B, C…を共時的に分析し、共時態 A, B, C…を析出していく。共時態とはベルクソンの現在、活版印刷機を過ぎ去る 1 枚の紙片であり、そこに刻印された下位コードである。言語分析、習俗分析の場面においても、各々のリネージ、各々の共時態を産出し、駆動させている尖筆の運動が想定されねばならない。それらの共時態は一つ一つが逆円錐形の尖筆の一断面として生成したものであり、それが顕在化したものである。顕在化される断面は逆円錐内の無数の断面が収縮と弛緩を反復する運動、逆円錐の頂点と底面を両極とした上下運動によって選択され、決定されたものである。したがって、フィールドワーカーが共時態 A, B, C…を析出していくということは、ベルクソンの過去、逆円錐形の尖筆の内部、そのすべての断面を探索するプロセスを開始したことを意味している。フィールドワーカーはベルクソンの過去の次元へと跳躍を果たし、逆円錐内の収縮弛緩運動、上下運動そのものと化していくこととなるのだ。あらゆるリネージの言語、習俗を貫通し、それらを変換関係の下に置く究極的な構造はどこに存するか。それは逆円錐の底面である。ヤコブソン、レヴィ＝ストロースは言語の根拠、習俗の根拠たる純粹過去へと跳躍し、そこにおいて潜在的に胎動している究極の構造、あらゆるリネージを貫通する変換行列、言語、習俗の基本構造を導出した。それこそが「音素の三角形」「料理の三角形」なのである。ドゥルーズの表現を用いるならば、彼らはベルクソンの過去の構造を導出した“歴史人”なのだ。

結語：提喩と隠喩，道徳と倫理，グローバリゼーションとグローカリゼーション

レヴィ＝ストロース人類学が、その共時態 Δt の概念を突破口にして、ベルクソン主義人類学へと変貌する過程を確認した段階で、我々はグローバリズムの瓦解という目的に向けて、次に何が問題となるのかを提示し、暫定的結語にかえなければならない。要は、一般性と普遍性の問題が、道徳と倫理の問題、ひいては提喩と隠喩の問題に引き継がれるということである。

ヤコブソン、レヴィ＝ストロースはベルクソンの現在の共時的分析、ベルクソンの過去の通時的分析を経て、言語、習俗の基本構造へと到達した。この過去への跳躍によって獲得された基本構造を、我々は未来への飛翔において一般性として振る舞わせる方向ではなく、普遍性として振る舞わせる方向において使用していかなければならないのだ。これこそが通時的分析の第二段階、ベルクソンの未来の分析のテーマであり、課題である。

人類学的にパラフレーズするなら、ベルクソンの現在の共時的分析、ベルクソンの過去の通時的分析を経て基本構造を導出する過程は、事象から原理を析出する文化人類学の営みに対応する。原理へと到達した人類学者は、その原理をもって再び事象へと帰還し、現実の社会の創造的変革のために使用するという社会人類学の営みへと向かわなければならない。その際、この基本構造の使用が、国家のごときトップダウンでの使用となってしまうならば、それは基本構造を道徳的規範として作用させることを意味してしまうだろう。グローバリズムの問題は、国家によるトップダウンでの原理の適用という問題の極限形態である。国家を超えた金融資本主義、新自由主義、新保守主義というイデオロギーがトップダウンで適用され、民衆を羽交い絞めにしているのだ。我々がグローバリズムへの抵抗、その瓦解へと向かう過程の端緒に立ち至るには、一般性に抗する普遍性に寄り添った原理の使用法、グローバリゼーションに抗するグローカリゼーションの方法を探求しなければならない。つまりは、その原理を民衆がボトムアップで使用する倫理的条件となるように作用させていく方法を提示しなければならないのである。それはリネージュの特異性を圧殺する適用ではなく、リネージュの特異性を繁茂させる創造的な使用法である。この問題系のさらなる検討は来るべき機会に譲ることとし、ひとたび筆を置くこととしたい。

参考文献

- 小田 亮, 1989, 『構造主義のパラドクス』勁草書房。
- , 1994, 『構造人類学のフィールド』世界思想社。
- , 2000, 『レヴィ=ストロース入門』筑摩書房。
- , 2010, 「「家」の比較研究に向けて」, 出口顯・三尾稔(編), 『人類学的比較再考』(国立民族学博物館調査報告)人間文化研究機構国立民族学博物館, 125-146頁。
- クラストル, ピエール, 1987, 『国家に抗する社会』渡辺公三訳, 書肆風の薔薇。
- シャルボニエ, ジョルジュ, 1970, 『レヴィ=ストロースとの対話』多田智満子訳, みすず書房。
- ドゥルーズ, ジル, 1992, 『差異と反復』財津理訳, 河出書房新社。
- ドゥルーズ, ジル, フェリックス・ガタリ, 1986, 『アンチ・オイディプス』市倉宏佑訳, 河出書房新社。
- ヤコブソン, ロマーン, 1977, 『音と意味についての六章』花輪光訳, みすず書房。
- , 1983, 『詩学から言語学へ——妻ポモルスカとの対話——』伊藤晃訳, 国文社。
- リーチ, エドモンド, 1990, 『人類学再考』青木保・井上兼行訳, 思索社。
- , 1985, 『社会人類学案内』長島信弘訳, 岩波書店。
- レヴィ=ストロース, クロード, 1969, 「人類学の創始者ルソー」塙嘉彦訳, 山口昌男編『未開と文明』(現代人の思想15)平凡社, 56-68頁。
- , 1970, 『今日のトーテミズム』仲沢紀雄訳, みすず書房。
- , 1972, 『構造人類学』荒川幾男・他訳, みすず書房。

レヴィ=ストロース, クロード, デイディエ・エリボン, 1991, 『遠近の回想』 竹内信夫訳, みすず書房。

From Structural Linguistics to Bergsonian Anthropology via Structural Anthropology

Munenori HAGA

The aim of this article is to theoretically show that anthropology can be a means of glocalization, that is, it can resist and collapse the structure of globalization. The article examines the process by which Levi-Straussian structural anthropology can change into Nietzschean anthropology via Bergsonian anthropology. The article demonstrates this point by underscoring that Jakobson's and Levi-Strauss' concept of "synchrony" in structural linguistics and structural anthropology respectively, and Bergson's idea of "present" in philosophy are compatible with and replaceable by one another, as far as each concept holds, reduces, and condenses a certain thickness of time.

While Stalinism gives rise to nihilism, the Nietzschean way of overcoming nihilism can also provide a means of collapsing globalization, which can be considered synonymous with neo-Stalinism. When anthropology becomes a field of practice for Nietzschean philosophy, Levi-Strauss reaches "the center of possibilities." In other words, it enables the emergence of the field of perspectival anthropology, or Deleuzian anthropology. By introducing and breeding into structural anthropology the perspectivism of Nietzschean philosophy, this newly emerging field helps us move out of the problem of comparison and the dead-end of cultural relativism in which the existing anthropology is trapped.

Keywords: Jakobson, Levi-Strauss, Bergson, Nietzsche, Deleuze